

『稿本天理教教祖伝』第5章の冒頭に、「教祖は、陽氣ぐらしをさせたいとの、親神の思召のまにへ、慶應二年から明治十五年に亙り、よろづたすけの道として、たすけづとめを教えられ、子供の心の成人につれ、元の理を明かし、たすけづとめの全貌を整えられた。」とあります。

おつとめは、“よろづたすけ”の手段であり、天理教の信仰の要たる大切なものでありますが、そのおつとめを教え始められたのは、教祖が“月日のやしろ”となられてから直ぐではなく、立教より28年も経ってからのことでした。そして、そのおつとめの全てが教えられ、形の上で完成したのは、立教から44年も経ってからのことなのであります。

おつとめを教えられる以前の教祖の救済はどういうかたちであったのかと申しますと、最初は、中山家の財産を処分して困窮している人たちに施すということから始まりました。そして、10数年にわたる施与の結果、貧のどん底に落ちぎられた教祖が次にとられた救済のかたちが、“をびやゆるし”を道あけとして始められた“身上たすけ”であり、“扇の伺い”などによる“事情たすけ”でありました。

中山家の母屋を取り壊されたのが嘉永6年(1853)頃、残った田地3町余反を10年の年切質に入れられたのがその2年後の安政2年(1838)。立教の天保9年(1838)から15～16年かけて貧のどん底に至り、そのどん底の時代の安政元年(1854)に、初めての“をびやゆるし”を三女のおはる様に出示されたのです。

そして、それより10年後の元治元年(1864)頃から、熱心に信心する者50～60人に“扇のさづけ”を渡され、信者の分布が大和の国中の山辺、添上、磯城、生駒の4郡、10数カ村に拡がりました。その中から、後年教祖の高弟として道一条に通られた仲田、辻、山中、榊井、飯降などの先人が出てこられたのであります。さらに、この元治元年の秋につとめ場所の建築が始まり、10月26日に上棟式。その後大和事件がありましたが、飯降伊蔵様のご苦勞により竣工するのです。

つまり、教祖による救済の道すじは、最初は物(金品)による救済という、誰から見ても分かりやすい救済をなされ、続いて、親神様のご守護を直接感得しやすい、身上・事情のたすけ一病気や人間関係のトラブルからのたすけ一を顕していただきました。そして、その後、おつとめによるたすけを提示され、最後に教義の根源である“元の理”をお教えくださったのであります。

施しや身上・事情のたすけは、人間の方からひたすら御利益を願うものであり、程度の差はあれ従来の信仰でも得られないものではありません。しかし、天理教のおつとめは、それまでの拝み信心とは全く異質な救済の理念・方法であります。おつとめは(個人とする自分のためのお願いづとめを除いて)“たすけづとめ”であって、自分だけの“たすかりづとめ”ではありません。親神様が人間を創られた元のお働きを今に顕し、病の根を切り、あしきを払うて、人々の心を澄み切らせて、世界

を陽氣ぐらしに立て替えるという、壮大な救済を目指すものであります。

それゆえに、単に目の前の悩みからの救いを求めて集まった御利益信心の人たちしかいない時代には、おつとめを教えられることはなかったのです。世界のたすかり、末代の救済を目指す救済手段であるおつとめは、神恩に報じる心を持つ人たちが現れ始めてから教えられるようになったのです。立教以来約30年の年月を経て、ようやく、ご恩報じをする心を持った人が僅かながらでも出てきたので、そういう人たちの信仰を基盤におつとめを教え始められたと悟れるのであります。

このように、おつとめを教え始められるまでには長い年月があったのですが、それでは、そのおつとめを教えられる以前の時間が無駄であったかということ、決してそうではありません。その期間の教祖のご苦勞の日々も、尊い“ひながた”の道すがらであり、私たちがその後を慕って通る道中なのであります。

つまり、今の私たちの通るべき人だすけの道すじも、最初はおたすけ人の方が目に見える形で人だすけをする。相手のニーズに応じて、種々手を差し伸べさせていただく。つまり、おたすけ人からの持ち出し一方の親切をすることからはじまるのです。

しかるに、そういうおたすけ人が親切を尽くした相手が、そのまま道の信仰についてくるようになるかということ、必ずしもそうではありません。多くの方は、目先の悩みが解決すれば、知らない間に何処かへ行ってしまう。中には、後足で砂をかけるようなことをしていなくなる人もいます。しかし、それが、よふぼくが次に身上・事情のおたすけの段階に進む上での大切な伏せ込みになるのです。つまり、その後に出会うおたすけの場面でどれだけ鮮やかなご守護が見せられるかは、このおたすけ人の方からの持ち出しの時期の長さ、真実の大きさ・深さによって決まるのです。

「施しは、資産家であれば誰でもできるが、資産がない者にはできない」などと言う人がいるかもしれません。しかし、教祖は、「食をさき着物を脱いで、困って居るものに與えられるのが常であった」と『稿本教祖伝』にあるごとくに、“有るからできる、無いからできない”などという議論が無意味なほど、徹底した施しをされたのです。つまり、その後現れた教祖による不思議・めづらしいたすけが、他に類を見ないものであったのは、教祖の施しの道すがらが他に類を見ないほど徹底したものであったからなのであります。

今の時代のおたすけ人が通る道中においても、先ず与える一方の道すがらがあり、その真実の伏せ込みの上に数々のおたすけが上がる。その不思議・めづらしいたすけを体験して信仰を確立した人たち、つまり、ご恩報じの信仰生活をするようになった人たちがさらに成人して、世界だすけをめざすおつとめの奉仕者へと育っていく。そして、その上で、各々が確かな教義を学び身に付けていくという順序を踏んでいくのが、“ひながた”をたどる信仰の歩みだと思っております。